

第八回

国語と日本語の連携を考える会

2001年7月28日

於：早稲田大学日本語研究教育センター
8階会議室

前半（議題提出）

細川：皆さんこんにちは。国語と日本語の連携を考える会の第8回になります。早稲田大学日本語教育センターの細川と申します。8回になりまして毎回色々なテーマを設定しておりますが、今日は「思考と表現を結ぶ言語教育」ということで、三宅さんと門倉さんにお話をいただきます。例によって20分づつ位お話しいただいて、その後、かなり長いディスカッションをしようかと思っています。ご意見をどしどし出していただきたいと思います。

では、始めに、恒例になっております、発起人の1人、竹長さんからちょっと一言、ご挨拶いただきます。

竹長：紹介いただきました埼玉大学の竹長です。細川さんと、この「国語と日本語の連携を考える会」を始めまして、第8回を数えるに至りました。だいたい年2回ということで、1月と7月にこのところ行って参りました。細川さんといろいろ相談しておりまして、この

ペースですと来年の7月の回には第10回を数えることになりましたので、そこで、記念いたしまして、現在のところ予定ではありませんが、論集という形で本を出すということを考えております。この会の中で、という狭い範囲に限らず、全国の研究者、大学院生をふくめて、広く公募して、こちらで審査させていただいて載せるという形にして、依頼原稿もふくめて、そういったものを発行したいということになっています。皆様、ふるって応募していただきたいと思います。

今日の研究会は、細川さんから紹介がありましたとおり、三宅さんと門倉さん、お二人から発表いただきます。それでは、私の挨拶はこの辺で終わらせていただきます。

細川：それでは、早速、三宅さん。お願いします。

三宅：はい。三宅と申します。私は東洋大学の文学部の日本文学文化学科というところで、日本人学生に対する日本語学ということをして今、教えております。私はたまたま80年代にイギリスに住んでたんですが、そのころに日本語教育に携わることになりまして、それ以来、ある程度長い期間日本語教師として教えてきた経験がありますので、その意味で、日本語を、日本人、母語話者に教えるということ、あるいは、非母語話者に教えるということの問題意識をずっともってきております。そういうわけで、この研究会で、今回お話させていただくことができまして、大変うれしく思っておりまして、今日のお話は、たいしたお話はできませんが、その後のディスカッションの糸口になるような話ができればと思っております。皆様にお配りしたレジюмеに沿って進めたいと思いますので、ご覧下さい。

ここにいらしている方は、「日本人学生の「日本語」教育を考える」というこのタイトルに対して、多分かなりご理解をいただいているのではないかとこのように考えておりますが、「日本語」というふうに括弧でくくったのは、いわゆる国語教育で語られている枠組みを超えて、日本語を第一の言語として使い、自己表現するための日本語の教育という意味で使っております。ですから、従来の、非母語話者に教える日本語教育ということも含めた日本語、教育というふうに考えていただきたいと思えます。私の立場といたしましては、ことばというものが恒常的な static なものではなく、社会や文化の変化と無関係なものではないということに関心を持っています。現代社会は特に、ここ十年を考えましてもめまぐるしく変わっております。ですから、大学生のことばへの認識・自覚というものも変化するのが当然だと思えます。そういうことに関して、ちょっと規範を重視している人は、言葉が乱れているとか、ことばづかいを知らない、などといって批判するわけですが、こういった問題は、現象だけを捉えていては解決できるような問題ではないと思えます。

まず、どのくらい大学生の日本語力が乱れているか、どのくらいの日本語力なのかという現状についてちょっと知っていただくために、実際の日本人の学生の実例を用意しました。レジユメの枠に囲ってある部分です。ちょっと言い訳をその前にしておきたいんですが、大学での実例ではありますが、大変問題を含んでいる実例でありまして、私の大学の平均的なものではございませんので、これはかなりひどい学生がいるな、と思われないうように。このようなサンプルが取れるとい

うことに私、小躍りしたんですね。こんなに短い文章の中で、これだけのいろんな問題を含んだものというのはなかなかございませんで、こういった問題のいっぱい詰まったものはうれしかったわけです。誤解が生じるといけないので、一言申し上げます。それで、この文章というのは、私が担当しております、日本語概説という一年生を中心とする、日本語のイントロのクラスで、300人以上、今年を受けております。まず、日本語概説ですから、国語概説ではないわけで、そこで、日本語と国語の違いというものを認識していただきたいわけで、課題を1週目に出しました。その課題というのは、少なくとも3種類以上の国語辞典をひいて、国語と日本語の記述の違い、取り扱いの違いというのを調べて、それぞれの意味をまとめなさい、と。それに伴って、自分の気づいたことをコメントしてくださいという課題でした。実際、もうひとつ皆さんにお配りしている切り張りのハンドアウトがありますが、日本語の辞書、国語辞典をひきますと、ここには5つ出しましたが、記載が随分違うということに気づきます。例えば岩波の国語辞典には「日本語」の項目がありません。他も見てみると、「日本語」が「日本」のサブカテゴリーとして入っているものがあつたり、定義もそれぞれ、で、見てみるといろいろと気づくことがあるわけです。その気づきをコメントしてもらおうということなんですが、この枠組みのところ、読んでみると時間がなくなりますので端折りますが、ここで大変顕著に見られるのは、話しことばと書きことばの混合、というか、話しことばの性格のものがかなり混じっている、それから誤字がある、それから表現力や語彙力の稚拙さ、というのが特に挙げられま

すね。この人のことを、いい意味で捉えるなら、多分コメントということが、コメントではどういった文章スタイルをとればいいのかわからなかったということが、こういった話しことば的な要素がいっぱい入ってきている要因だと思います。全体を通して言えることは、自分の考えていることを人に分かるようにまとめる力というものの不足、これを大変感じるのではないかと思います。

こういう学生は、普通はこういった誤字や話しことば的な要素というのは1箇所か2箇所くらいしか出てこないものですが、たまたまこれはいいサンプルを用意したわけですが、こういったスタイルや誤字に自覚がない学生が増えているのではないかと、ということを考えてしまうわけですね。これなんかは、大学で日本語力をつけるということが私たちに求められているのではないかと、ということがいえると思います。

2番のところですが、日本語の教育を考えると、大学の教育の問題とは無関係に語ることはできなくなるわけで、例えば、以下に書いたようなことを考えてしまうわけです。

例えば1番。大学はどのような教育をしようとしているのか。これは大学によって違うと思いますが、例えば私の大学では、1 - 2年生は浅香というところで教育されていて、3 - 4年生になればハクサンに来る。工学部などは他のところにもいってますが、文系はそうってます。そうすると、ハクサンをメインとした中央にたくさんいて、学生は浅香の方に大人数の授業をしているという形態で、どういう学生を育てたい授業をしているのかという疑問が湧いてきますが、あまり詳しくは言えませんが、大学でどういう教育をするつもりなのかということはずごく大きな問

題だと思います。

それから学生は大学に何を期待しているのかということ。これだけ大衆化しますと、学生が何をしに大学に来ているのかということが多々あると思います。それから学生の授業への関心や学習態度はどのようなものなのか、ここ1 - 2年の傾向として、特に300人以上のクラスで概説などを担当しますと、出席が取れないんですね。丸をつける暇がとれなくて。そうすると、来なくてもいいわけです。来たければ来て下さい、という授業なんですけど、そうしますと、例えば授業が40分50分経ってから来る、とか、反対に1時間くらい経ったらすっと抜けていく。昔、映画で時間を区切って入れたりしないで、いつでも入っていいような、今でも田舎ではそうらしいですが、いつ入っても出てもいいというシステムがあったと思うんです。そんな感じで、何かやってるから見に来て、ちょっと携帯でメールが入ったから出て行くという雰囲気なんですね。そうすると授業って一体なんだろうという気がしてくる。

それから、学生はどのような人生観や価値観を持っているか、ということや、学生の日本語力や日本語観がどんなものなんだろうかと、多々考えるわけですが、その一つ一つが重要なことだと思いますが、今日は、特に学生の日本語力、日本語観というものがどういうものか、ということを中心に、私が受け持っている「現代日本語表現」というクラスがありますが、これは文系なら、文学部、経済学部、社会学部、というのが受けている、昔の教養的なものですが、そこでレポートを書くという、大学で言えば本当に根幹というかすごく基本的に典型的にやられている作業だと思いますが、そういうものを指導する

ときの問題点,方向性について,国語教育との関連から考えてみたいと思います。

3番目ですが,レポート作成に必要な指導。ということで,まずレポート作成で重要なことについて考えてみたいと思います。さっきの1番の所のいろいろな問題のある文章がありました,そこで問題になっていることも含めて,個々の1~9あたりまでに挙げたことに対して,学生が自分で気づきというものを持っていなければならないのではないかと思います。1.誤字,2.語彙,3.書きことばと話しことばの違い,4.構成,5.研究の手順,6.発想力.7.考察力.8.推敲,9.その他。これで他にもあると思いますが,すごくラフに書いてありますが,最近昔から論文やレポートの書き方というものはかなり出つづけていまして,書店で見ること多いと思うんですね。最近増えてきたのは,日本語表現法というようなタイトルのあるような類書ですが,そういったものを見てみると,昔からあるような旧来のタイプ,いわゆる国語教育的なものというのは,書きことばと話しことばの違いとか,構成,それから研究の手順,推敲をよくする,といったそういうことが中心に書かれていて,それから日本語教育の流れで,例えば留学生のための日本語論文の書き方というものも出てますが,そういったものは日本語教育の中から日本人のほうに寄ってきたものだと思うんですが,個のタイプはいわゆる語彙とか誤字とかそういったものにも気をつけながら,書きことばや話しことばの違いとか構成とか研究の手順とか,その辺りについて述べてあると思います。

このふたつのものを活用しても何か足りないと思われるのが,発想力とか考察力という辺

りで,これは思考のプロセスの問題だと思うんですね。この辺りについてはあまり力点をおいて記述,指導しているものがあまり無いと感じております。多分,大学の中でも,日本語表現の講座は増えてきていると思うんですね。というのはやはり日本人の大学生の日本語力というものが,何とかせねばいけない,ということが,だんだん大学の中でも自覚されてきているわけだと思います。じゃあ,学生のレポートを書くときの問題点にはどういったことがあるのかということについて,別の角度から考えてみたいと思います。

主に3つ考えました。まず,技術面から言うと,今まで学校で教えられていない,高校までの国語教育では教えられていない,例えば,ことばの教育,自分の意見や思想を表現することが活動として行われていない。それから自分の言葉を客観的に自覚する機会がない。これも学校の中で,例えば現代文法ということは,中学辺りでチラッとする程度で,それ以降はほとんどやられていない。そうすると大学に行って,だいたい文学関係は文法というのがありますが,チンブンカンブンなわけですね。本当に。文法のことだけじゃないですが。自分の使っていることばってどんなものなんだろう,ということを考えるチャンスがあまりない。それで,口やかましい大人から「ら抜き」がおかしい,なり,しり上がり口調はおかしい,とか言われるんですが,反論するとか,それはなぜかということを考える余裕というか,力の無い状態「あ,ら抜きはいけないんだ」としか考えられないわけですね。これじゃちょっとまずいんじゃないかと思います。

それから,×式教育とか白黒判断教育というのが試験の関係もあって,すごく多くて,そ

うしますと、短絡的な表現力になるんじゃないかと思うんですね。どうも学生というのは単語だけ言うんです。例えば私と話しているときに、「何なの？」と聞いても単語だけで。その単語が文としてどうつながっていくのかが見えてこないことがよくあるんですが、そういうのもなりすぎてるんじゃないかという気もしますし、それからよく、正しいか間違いかに興味が集中していて、実は世の中正しいか間違いかじゃなくて、間違いの傾向もあるけれど正しい部分もあるとか、いろいろグレーなところが本当は多いんですが、そういうところにあまり注意を向けないということがある。それから論文のことで言えば、小論文のことが入試では出されるんですが、これはいわゆる論文とは形も内容もすごく違うものであると思われまして、こういうものが論文と思っていると、すごく大学に行って苦労するんじゃないかなと思います。

それから2番目の思考面について言うと、現代的な問題として旧来の社会的枠組みというのと現代の欧米系、ポストモダンの価値観から来る社会生活のズレというのがすごくあって、ツケがまわっているといえませんが、そういうことを解決しないで来たからだとも思いますが、どう生きればいいのかわからない、ということが若い人の中にはあると思います。

それから3番目の学習面ですが、学校という枠組みの中で生きてきた学生の傾向なんですけど、大変受動的な学習姿勢が多く見られまして、自分から学ぶというのではなく、授業に行くのが何かを教えてもらいに行くという気持ちである。それから授業をやっていて、自意識がすごく強くて、周りを気にして何も言えないんですね。あとから質問には来らん

ですが。目立つことへの恐れがすごくある。それから、さっきの×式のところでもありましたが、正しさへのこだわりがすごくありまして、間違えることをすごく恐れるんですね。それからプロダクト重視で、結果がどうかということで、その結果に至るプロセスということがすごく欠如しているというように感じます。それから課題なんかを出しましても、課題をやりゃいいんだという感じでそれを表面的に処理する学生がかなり見られて、課題を出すということはこっちに意図があるわけですがそれに気づかない、注意を向けられない人がかなりいる。それから、特に教養のような大量の大教室でやっているところに留まって、人とか先生に個人として対峙するという姿勢が欠如しているという感じがするんですね。

こういった問題点があるんですが、こういった問題点はレポート作成上マイナスに働くことが多いと思いますし、教師の指導から見ても大変やりにくいところがあるとおもいます。私は学生が今どういう力があるかということの評定する気持ちは無いわけで、学生が今の力をどう伸ばすかということに興味があるんですが、そういうことを本当に分かるというか分かってくれる人が、特に大きな人数でやっているとなかなか難しい気がします。

ちょっと長くなってきましたが、4番目のレポートを書く指導のほうにまいります。

レポートを書く指導としてまず考えねばならないことなんですけど、レポートの種類、どういったものがあるか。まずはレポートは自由課題か課せられたものか、ですが、大学ではおそらくやはり課せられたものが多いようです。それから初年度辺りでは、何とかにつ

いて調べよ、とか、何とかについてまとめてこいというようなものが意外と多いようなんです。しかし論文レポートの書き方とか日本語表現指導法とかいうところでやられていることは、どちらかというところ、論文につながるような自分の意見や仮説があり、それを基盤に研究していくようなレポートのタイプを主眼に置いている。またその大まかな課題として、後で説明する「若者のことばについて」というようなものを出しておいて、それを学生の関心と結びつけて書かせるというタイプもあるわけで、こういう先生がどういうタイプのものを出しているのかということをごちらのほうが知らないと、一所懸命レポートの指導をやっているけれども、その人の目の前には役に立たないということがえてしてあるようで、学生はそういうところで悩んでいるようです。

実際にはレポートの形式というのは、構成や、ということばを使うか、とか、そういうことは少なくとも、過去の学生がある程度レベルの高いレポートを出せば、こういうのを真似てやってご覧というので、かなり学生は自分で学んでいくことができるわけですね。ある程度意欲さえあれば。そういうことに関してはある程度いいですが、それより大事なのは、やはりレポートの課題をどう捉えるか、あるいはどう調査するか、といったようなレポートを作るまでのプロセスのほうだと思います。こうしたことが重要だと思うし、また教師の介入が必要だとも思いますが、あまりやられていないのではないかと考えます。そこで、これからは私の事例で、私は「現代日本語表現」というのもって2年目で、半期科目なんです。まだ大変試行錯誤で、どう指導していったらいいのか分からない状態なん

ですが、だいたい12回くらい前期にありまして、今度の課題は「若者のことばについて」というのを出して、レポートにして書き上げて提出するというのを目標にしました。その中で表現技術というのと思考プロセスの両面を指導したいと考えました。最初のところではやはりレポートらしい言語表現とか文章構成とかがどういうものであるのかということをご少し入れながら、こういうものなんだ、少し違うな、ということをご自覚させながら、途中の辺りからことばについて課題として与えられたとき、どうアプローチしていけばいいのかということをごいれつつやっていたわけです。

この授業は実は70人から80人の受講者がいて、いわゆる日本語教育で学生に手取り足取り書いてきたものを直したりとかをやってられるようなものではないんですね。それで何とか工夫しなければいけないので、今、工夫していることをここにあげてみました。本当は、インターネットとか使ったりしてお互いに議論があればいいんですが、人数が多すぎてインターネットをやったらすごいことになるだろうということがあります。もうひとつは学部によってそういう環境が整っているところと、例えば文学部のようにカジュアルにそういうことは学生に任せているところと、社会学部みたいに全部強制でやっているところといろいろあって、環境が整わないので、しょうがないので、ファイルブックを作らせました。70人のファイルブックを持って歩くのは大変なんですけど、でもなぜそうさせたかということ、どうファイルブックを使っているかということ、毎週ファイルブックに疑問とか問題点を入れて提出させているんですね。そうすると教師は個々にいち

ち詳しく見ていくことは、申し訳ないけれど私の時間的なことを考えるとできません。しかし、多分みんなの前で重要なポイントを言えばある程度学生は学ぶんじゃないかと思って、バラバラとみんな見てそして学生の認識が必要だなと思うことをいろいろリストアップして、次週の授業中に説明します。どうしてもこれは今っておかないとこの子は来週困るな、というときはそのファイルに何か書くわけです。そうすることによって、学生は毎回次の週の授業に返されたファイルを見ながら、授業中指摘されたことが、自分ならどうするののかということをしつづつでも学んでいけると考えています。

それから、授業のポイントとしては、どう書くかという技術ももちろん大事ですが、それよりもやはり論文やレポートを書くにはどのように問題意識を持ち、どのようにアプローチしていくかということが大事だと思います。このことについては、受験勉強をやっているときにあまり問題意識をもちすぎたら大変なんだろうと思って、その辺がみんなすごく押さえついたり、関心を向けないように育ったか、しないようにしているかで、かなりその辺が未熟な感じがするんですね。何でも疑問に思ったことを追及すればいいんです、と、いわゆる新しいブレインストーミングをしなければならぬということが起こってきます。

そういうことをして、ラフな説明になりましたが、最終的にレポートが提出されます。私が使っているテキストというのはくろしおで出ている『大学生と留学生のための論文ワークブック』というものをまず使っています。しかし、これは留学生のために作られたものですから、懇切丁寧で、いわゆる真面目な論

文とか卒論とか大学院の人には役に立つんだけれども、教養レベルの大学一年生の人には足りないし、いわゆるブレインストーミング、考えるプロセスという点では足りない。それを少し補充する意味で木下さんの「レポートの組み立て方」というのを使います。これも真面目な本で、真面目というか、取り組む前の頭の柔軟体操が必要な状態で、結局教師がやることが多いんですが。

そういうことでやっていって、少しは私は成果が出てきたと思います。授業中、学生がみんなの前では言わないけれど、いろいろ言うことがあって、それは考えさせられることが多いんですね。やはり教育というのは、学生がどういうニーズがあるかということではなくて、一番知っておくべきことだと思うのでここに少し書いたんですが、例えば、どんなことばが話しことばなのか、書きことばなのか分からない、ということがある。話し言葉でどうして書いてはいけないのか、というのが、ある。これは実は考えさせられるんですが。日本語の論文を見ると、何か、いかにも客観的に書いてあると思いがちですが、よく見ていくと、いろいろ視点の変化とかがあって、そうそうこれは簡単なことじゃないな、という感じがして気づかされることがあるんですね。学生の指摘で。それから、何で論文調でなければならぬんですか。たとえば高校の先生は、レポートを書いて話し言葉だったときに個性的でよかったと言われたんですけど、というコメントが入ったりするんですね。あと、意外と多いのは、段落と段落をどうつなげればいいのか、文章から文章のつなぎ目はどうつなげればいいのか。こういうことを実は意外と教えていないんですね。つなぎというのは意外と難しい

ところだと思いますが、こういうところは書いてないことが多い。それから、どんな資料を探せばいいのか調べ方がわからないとか、どういう課題にアプローチすればいいのかわからない、つまり課題にアプローチすることを今まで一度もしたことのない人たちが意外といて、そういう人たちはアプローチといわれても全然わからないということがあります。

ひとつ行を空けて書いたことは、今度は学生を見て思うことなんです、論理の飛躍をしていることに全然気づかないとか、それから、たとえばインターネットの情報というものを学生は今、非常によく取れるんですが、そういった情報と学術情報の信頼性とか価値の違いというのがわからない。あるいは事実と意見・感想の違いがわからない。若者のことばみたいなことをレポートにする場合、とくに芋づる式に調べなきゃならないんですが、そういうことに対する意欲が欠けている。それから大きなテーマをやってしまうと、卒論でもそうですが、終わらないことがわからない。それから分野の指導の先生によって言うことが違うし、ここには書きませんでした、論文スタイル - 引用の仕方とか - も違いますよね、そういうことがある。それからとくに残念に思うのは、こういう大きなクラスですと、多数のいいかげんな学生と大変熱心な真剣な学生とがあって、照準をどこに定めるかということが問題になってくる。あとからもう少しお話ししたいのですが、こういうことを考えてみると、私たちの日本語の教育が第一の教育をする場合に、少し大学の教育観というのを変えなければいけないんじゃないか。つまり、教師は知識のある人間として学生にその知識を伝授するという立場では

もう成り立たないし、これから学生を育てていくことはできないんじゃないかなと思います。そういう意味で、もし教師と学生の関係というのは良いように変わっていけば、大変協力的で生産的でクリエイティブな形で、伸びていく環境が作れるんじゃないかなと思います。

細川：ありがとうございました。では、続けて門倉さんをお願いしましょう。

門倉：横浜国立大学の留学生センターで留学生に対して日本語を現在教えていますが、8年前くらいまで13年くらいは山口大学で、教養教育の中で哲学と論理学を教えていました。とくに論理学を教えていく中で、このCritical Thinkingという教育領域に出会ったわけです。その当時は論理学を大学の1年生に対して教えていく中で、Critical Thinking的な問題なんかを挟んでやっていったんですが、そういう過程の中で、今の三宅さんの発表と非常に近い問題意識を持ったんですが、三宅さんのレジュメの2ページ目のところで、論文レポートの書き方の本なんかで、6と7の「思考のプロセスを見ていく」というのが欠けているのではないかとか、あるいは高校までの国語教育の中でことばの教育、あるいは自分のことばを客観的に考察する、そういう機会が少ないのではないかと、というようなことを、私も、いえ、もちろん高校までの国語教育の現場をよく知っていたわけではありませんが、今もよく知ってはいませんが、当時大学の1年生に論理学を教えていく中で、そういうことを強く思われました。

とくに思考のプロセスを見ていくことの重要

性というのは、私のレジюмеにも書いておきましたが、Critical thinkingの核心のところと近い、そういうことばではないかと思えます。

それから、三宅さんのレジюмеの4ページのあたりに、段落から段落をどうつなげるか、とか、章から章へのつなぎとか、そういうのが非常に重要なんだけどなかなか難しい。論理学という学問がまさにそのつなぎを問題にする、文と文、あるいは段落と段落をどうつなげていくのが論理的にいいのか、健全なのかそういうことを考える学問なので、そこら辺の論理的な教育がやはり足りないのではないかということです。

その次の「論理の飛躍に気づかない」とか、「情報の信頼性とその情報の価値評価」ですが、これは情報がどのくらい確からしいか評価している。それから「事実と意見・感想の違い」このあたりの問題も広い意味での論理学の問題であり、それから今日お話したい、Critical Thinkingの教育領域がまさに問題としているところなので、三宅さんとは事前に話し合っておかねばと思いつつ、話し合う時間が取れないでいたんですが、かなりつながってるなと心強く思った次第です。

では、私のレジюмеの方を見てください。

Critical Thinkingを訳すときに、批判的思考、ということですが、これはアメリカのEnglishの教育、アメリカの英語教育とかアメリカの国語教育というのはちょっとなじまない感じがするので、あえてEnglishとおきます。1960年代以降、教育領域として発展してきたものです。これが幼稚園から大学までのどの段階でのEnglishの教育にもある一部として取り入れられているというのが大勢ではないかと思えます。ちなみ

にAmazon.comというインターネットの書店を見てみると、Critical thinkingで引いてみると986件も本が見つかります。それくらい盛んにテキストが出ていたり、それについて研究されている領域なわけです。

じゃあCritical thinkingとは何なのかというと、これは論理学で、先ほど言ったように、演繹論理学といわれている、必ずそうなる、という数学のようなそういう論理だけではなくて、多分そうなるだろうという個々の事例から一般的な法則を推定したりするような、帰納と呼ばれるような領域も含んでいるし、また、間違った論理展開、つまり虚偽論、そこら辺のものを含めた幅広い意味での論理学がカバーされている。それから一般意味論というのは最近あまりはやらなくなつたというか、あまり問題にされませんが、右下の参考文献の一番下にあるハヤカワの「思考と行動における言語」という本、これなどは1960年代くらいにアメリカでも日本でもしきりに読まれたなかなか面白い本なんです。具体的には、ことばとことばの指し示す対象との関係、これは意味論なんです。それに一般というのがついているのは、ことばとことばが指し示す対象との関係を考えていくことによって、それが話者とかそれを聞いていることばがどういう影響をその人にもたらしていくか、というそういうところまで視野に入れているので「一般理論」といっているわけです。あるいはレトリック論、さらには近年メディア・リテラシーと呼ばれているような、テレビや新聞や広告の情報をどう受け止めればいいのか、といったことまでカバーした非常に広範な領域が含まれています。ですが、中心的な課題というのは、情報が氾濫している現在の時代環境の中で、

与えられた情報内容の中の思考過程や、自分自身の思考過程というものを捉えなおしていく、そうすることによって絶えず合理的で偏りの無い思考を求めていく姿勢、態度、心構え、知識、技法を身につけるということになります。ここでクリティカルということばが使われていますが、日本語で批判というわけなすという意味になりますが、もともとのギリシア語やドイツ哲学の系統で言えばクリティカルというのは反省的というか、自分の考えを捉えなおすということにもなるので、先ほどの三宅さんの言う、思考プロセスについて考えること、いわばメタ思考的なことを表していると言えると思います。具体的な内容は、ちょっと古い本になりますが、井上尚美さんの『言語論理教育への道』という1977年に出版された本がありまして、これが非常に批判的思考について詳しく紹介しております。井上尚美さん自身が国語科の中に言語論理教育を組み込みたいという自らの問題関心があって、その中で批判的思考について紹介しているという本なので、非常に特に国語科の先生方には参照していただきたいと思った本です。その中で、私のレジュメの6に、井上さんの本からアメリカのクリティカルシンキングでどんなことが問題になっているのかというところを切り張りしました。右から始まって、批判的思考能力とは何かということで、「問題を定義する能力、問題の解決に関連のある、適切な情報を選ぶ能力」などなど、いろんなクリティカルリーディングについて紹介しているところです。左のほうに1960年代後半のアメリカの教育課程でしょうが、カリフォルニア州の公立学校国語科教師に、クリティカルシンキングがどう取り入れられているのかという

ことを、大まかに幼稚園から高校三年まで、こんな感じで指導内容として取り込まれているということが紹介されています。レジュメの始めのほうに戻ります。

井上さんの本に1950年代の日本の「言語編」の教科書の内容が収録されています。これがレジュメの後ろの7ページに、昭和の戦後のアメリカの影響もありますが、昭和26年に指導要領が改訂されて文学編のほかに言語編の二本立てにしてもよいという文部省の指導が出たということです。今は総合編という2つ合わさった形に戻っていると思いますが、今風に言うと、言語技術的なものをひとつの教科書としてまとめるという発想があったということです。国語の言語編の単元一覧表を載せておきましたが、これを見ると内実がどの程度伴うのかはわかりませんが、面白そうな印象を受けます。たとえば、2年生の「放送の仕方」や、「講演と講義の聴き方」、3年生の「脚本の読み方」や「広告の作り方」、この辺りは現在の用語で言えばメディアリテラシー的な、メディアとの接触の仕方を教えようとしています。もっとおもしろいのは、光村図書のもので、ラジオの聞き方や映画の見方というものまであって、これがどのくらい教えられていたのかはわかりませんが、そういう現在で言うメディアリテラシーあるいは60年代以降のクリティカルシンキングにつながっていくようなことが、わりと古くから戦争終わってすぐの時期の言語編に繰り込まれようとしていたんだなということを感じました。井上尚美さん自身も、戦後の言語編の教科書が担っていたようなことを再興できないか、もう一度とりあげて再編成して、自分のしようとしている言語論理教育を国語科に組み入れるようにし

たい、という考えを持っていたようです。その後は私の知っている範囲で、国語科とクリティカルシンキングのかかわりを大まかにピックアップしているに過ぎません。

先ほどの三宅さんのテキストにも出てきた物理学の木下是雄さんの『理科系の作文技術』というのは大変話題になった本ですが、その中で「事実と意見の区別」というところは私も新鮮に受けました。それはクリティカルシンキングの根本的な教育内容のひとつなわけです。あるいは「パラグラフ思考」というのも出てきますが、これもクリティカルシンキングの中で重視されている教育領域だと思います。木下さんの問題意識は、木下さんが学習院の先生でしたから、学習院の初・中等教育の国語科のなかに取り入れられていて、言語技術教育と彼らが呼んでいるところで、初・中等教育のテキストの中で生かされているはずですが、その後、言語技術教育学会も発足していて、この辺りの経緯はカッコの中にある本などをご覧頂ければ分かると思います。

その他は、明治図書という出版社が出している国語科関係の参考書をざっと見たところ、関係ある参考所としては、ディベート授業や分析批評に関する参考書の中にはクリティカルシンキング的な観点を取り入れているような要素を見ることができると思います。

ただ私自身は10年以上大学で論理学クラスを受け持っておりまして、その中でクリティカルシンキング的なものをどう紹介していたらいいかということで、自分なりにちょこちょこ取り入れてはいたんですが、最近になって、私などよりもはるかに優れた、論理学テキストとしてクリティカルシンキングを柔軟に取り入れたものが出てきて、

優れた批判的思考のモデルテキストだといえると思います。野矢茂樹さんの『論理トレーニング』と『論理トレーニング101題』というふたつですが、これらを取り上げている問題領域は国語化領域にも取り入れることのできるものを提起していると思います。

具体的には批判的に考えるための練習問題としてどんなものがあるのか、ということですが、非常に広範な領域に渡っているので、きりがないので10個に絞って紹介しているのが、レジユメの「報告 - 推論 - 断定」から「4択問題」というところまでです。読んでいただければ分かると思いますので要点だけざっと見ていこうと思います。

「報告 - 推論 - 断定」というのは井上尚美さんの先ほどの本から取ってきました。木下是雄さんが言っているように、事実と意見を分ける、という技術は基本的な重要な事実ですが、ただ分けるだけでは足りないのではないかと私はおもっております、もう少しやるべきことがあると思っています。井上さんの「報告 - 推論 - 断定」でやっていることは、ただ分けるだけではなく、もうちょっと踏み込んでいて、たとえば、扱い方の例として、「口」で、「一人の生徒が、授業開始後十五分たってから教室に入ってきました。そのことについて述べた次の三つの文を比較しましょう。1.彼は遅刻した、2.彼はだらしない子供だ。3.彼は寝坊したに違いない。」この中で、「彼は遅刻した」は事実で、「彼はだらしない子供だ」というのは推論で、「彼は寝坊したに違いない」というのは断定、となるんでしょうが、こういう報告と推論と断定をするときに、どういう価値評価が文によって喚起されるかということを考えていかねばならないと思うんです。井上さんはそこ

のところを、一般理論というのを踏まえているので、ことばがそのことばを用いたり聞いたりする人間にどういう影響を与えるかに敏感でなければならない、ということを行っているので、単に事実と意見を分けるのではなく、より射程の広い取り上げ方につながっていると思います。

この問題は、実は私の動機の一部ですが、「評価を含んだ表現」につながっていくところがあると思います。

レジュメの裏になります。哲学者のラッセルが「動詞の人称変化」という皮肉な言い方をしています。自分に甘くて他人に厳しいわけで、ことばがプラスイメージを持っているとして、それは一人称表現で、中立イメージを二人称、マイナスイメージを三人称にくっつける、と。たとえば、「私は柔軟に事態に対応した」これはプラスイメージ。「君は意見を変えた」というのはどちらかといえばマイナスだけど、まあ中立。「変節漢」といえば、最近はあまり使いませんが、マイナスだ。こんなふうに、名詞ひとつをとっても、それ自体が価値表現を含んでいることがあるということなんです。そこらへんで、マイナス、プラス、ニュートラルと3つを挙げてみなさい、と私のクラスでやったところ面白い答えが出てきました。

真ん中のところのように、「おおらかだ／細かいことを気にしない／鈍感だ」「独創的だ／考え方が他の人と違う／変わり者だ」こういうふうに、同じものも言い方によってプラスにもマイナスにもなる。そういうときにどういう用語を選ぶのか、というとき、こういう問題に敏感にならねばならないということだと思います。

次に、その左ですが、「黒か白か」、All or

nothing 的な発想ではなく、もっと中間を認める多値的な考え方というのに転換していく必要があるんじゃないか。こういうことを考えるときに、論理学で言う「反対概念」と「矛盾概念」というのがありますが、たとえば「暑い／寒い」というのは反対概念で、つまり、反対概念は暑くも寒くもない中間があるということです。ところが、「生きる／死ぬ」のように中間の無いものは「矛盾概念」といいます。国語で言う「対概念」のように、ペアになっている概念というのは、反対的に対になっているのか、矛盾的に対になっているのか、あるいは単に対比しているだけで対になっているのか。こうした対が、どういった関係で対になっているのか、この点を考えることは大切だと思います。つまり、反対概念と矛盾概念を混同するということは、非常に危険な論理展開を伴うわけです。たとえば、誰かを自分と反対しているのは敵だ、とやってしまうのは、中立を認めないことになって、政治的に厳しい状態になると、多かれ少なかれそういった思考に陥っていくわけですよ。そういったときに冷静に、たとえば戦争に反対するか賛成するかということではなく、反対するのはみんな敵の手先だ、という発想に陥ってしまわないで、中立も認めることができる、そういった中間を認めるようになっていく、と思います。

次に「指示語」ですが、テストでは昔から定番で出てきましたが、意外とそれは重要な問題でもあるんですね。ここは野矢さんの『論理トレーニング』から引きましたが、結局、指示語は何をしているかという、文と文をつないでいる。それが指示語によってどういつながり方をしているのかを考えることは、まさに、文と文の論理構造に目を向かせるこ

とにつながっていくので、受験のように指示語を聞くだけでは、まだあまり意味がありませんが、そのつながりがどうなっているのか、ということを経験的に捉えなおしていくところに、論理的な思考につながるところがあると思います。

5の「論証図」は、批判的思考や広い意味での論理学の注目するところは論証なわけで、つまり、論証とは何かを主張するときに根拠を必ず述べますが、その理由が非常に論理で重要な単位ですので、それを非常に重視するわけです。そこでその理由・論証がどういう論理になっているのかということを経験的に図にして表すことが訓練になるということです。例題3のごちゃごちゃした文章を経験的に図式化していくと下のようになる、と。いろいろな記号を使っていますが、「 \vdash 」は論証、「 \vdash 」は例を挙げる、などなど。こうやって論証に注目させるのは重要な教育領域だと思います。

6は「隠れた前提・結論」といいますが、論証に注目すると前提と結論の関係を見ていきます。その時に、我々の日常使う議論では、分かりきったことは言わない、という原則に立っています。そうすると、論理学で言うようなきちんとした論証にはならない。必ずそこには省略がある。そういったときに、どういう命題が、内容が省略されているのかを冷静に考えていく必要があるということです。下の「問 71」は単純なので分かりやすいと思います。こういった単純なものは分かりやすいですが、下の「問 72」のように文章が出てくると、何が省略されている前提になっているのかを考えることが、非常に大事な作業になってきます。このように、省略されている議論を補った上で、議論を見ていくこと

は非常に大切だと思います。

7は「虚偽論」。間違った論理展開です。ほんの一部、サモンという人の『論理学』という本から、この本は非常に詳しく例を挙げて説明していますので参考になると思います。虚偽論は、間違っているけれどももっともらしく思える、というのが問題で、間違った論理展開なのに引っかかってしまうものを言います。

8は「メディア・リテラシー」で、たとえば虚偽論の宝庫と言われているのがコマーシャルで、サモンのEのところでもコマーシャルは槍玉に挙げられています。コマーシャルは一見非常にもっともらしい言い方をしてくるわけです。そこをしっかりと押さえておくということ。どうしてコマーシャルの商品が魅力的に見えてくるのか、冷静に押さえておくべきでしょう。

9は「論理パズル」で、これは全く私の好みで、パズルで論理的な考え方を順番に鍛えていくというのは面白いのではないかと思います。特に中学校の課程では、こうしたパズルを利用して基本的な論理作業に導いていくというのも有効だと思います。Smullyanという人の「この本の名前は何か？」という本で、この例は、Knight という必ず本当のことを言う人と、Knaves という悪者で必ずウソをつく。必ず本当のことを言う人と必ずウソをつく人の言っていることから、本当のことは何かを見極めると言うものです。右側は、ロジックプログラムというもので、問題文の内容をよく考えて、右の表のこれはありえないところを×でつぶして行って、残ったものが正解、と言うものです。たとえば、1は「Timothyの誕生日は誰か一人よりは前にあり、誰か一人よりは後にある」という命

題があったら、右の表の1日と29日は違うので×、というようにしていきます。これは私がカナダにいたとき、友人のお子さんが学校で論理的な能力を鍛えるためにしていたもので、面白いと思ったものです。

10はアメリカの試験問題は4択なんですけど、4択の試験問題で論理的思考をテストできないか、ということで作られたものなんですけど、特に読解能力なんですけど、左側の例はひとつ目とふたつ目の文章はどういうつながりをしているのか、というのをA - Dから選ぶと言うものなんですけど。たとえば、「サハラ砂漠で木が燃料にされて少なくなっている。/ 木は土壌を固定する力を持っているのでサハラ砂漠が広がるのを防いでいる。」このふたつ目の文はどういう繋がりが選べ。あるいは「貧者と富者」は以下のどの関係か、これは「愚者と智者」、つまり、無い者とある者。こういうものを読むと、いろんな問題を工夫するものだな、と感心する次第です。以上です。

細川：大学の先生は話が長いようで、ディスカッションの時間が少し短くなってしましますが、15ほど休憩してフリーディスカッションにしたいと思います。

今日は、大学生に対する教育ということで語っていただきましたが、必ずしも大学生に対する教育とは限定しないで、言語教育全体についてということで、さらに今日のテーマである「思考プロセス」と「表現する、表現を理解する」という観点から議論できると思いますので、ぜひ積極的にご発言ください。